歯周／補綴
Periodontics ／ Prosthodontics

小野 善弘・中村 公雄
Yoshihiro Ono　Kimio Nakamura

21 世紀における歯科の一モデルとして
ーー Interdisciplinary therapy を実践して 22 年ーー

最近、インプラント治療や審美歯科が強調され、**GBR** や **Sinus Lift** など高度な技術を要する最先端の医療が話題の中心であるが、毎日の臨床の中では、依然としてカリエスや歯周病に悩んでいる患者さんが多いのが現実である。カリエスも歯周病も予防並びに早い段階での治療の大切さは論を待たないが、患者さんは悪くなってからでないと来院しないことも事実である。カリエスは痛くなって気づくことがあるが、歯周病は **Silent Disease** と呼ばれるだけあって、自覚症状が出たときにはかなり進行していることが多い。そのような場合、ただ単にブラッシングや **SC/RP** のみによる治療では問題解決にならないばかりか、治療後の長期的安定は図れないことが多い。

成人の **80%** 以上が歯周病で悩んでいると言われている昨今、歯周治療なくして歯列の長期的予後は期待できないと確信している。歯周治療を行うに当たっては、歯肉、歯根および骨に現れる病態をどのように捉えるかにより、術式の選択も異なる。非外科療法、切除療法、再生療法、歯周形成外科、**GBR**、**Sinus Lift, Implant** など数多くの術式の中から、患者の失われた機能、審美の回復およびその治療結果の永続性のために長期的視野に立った治療計画の立案が大切である。それと同時に、歯科治療の目標は、動的治療結果の永続性である。治療の当面の目的は、様々に崩壊した患者の口腔の機能の回復並びに審美性の回復であろうが、その治療結果が短期間に崩壊するものであれば、治療としての意味をなさない。

治療結果の永続性を目指す上で求められる基本的なものは清掃性であろう。歯牙、歯列の長期的保存、安定のためには清掃性の良否が大きく関与することは周知の事実である。しかし昨今の歯科治療は、審美性が偏重され、清掃性を軽視したものが多く見受けられる。動的治療期間中に治療後の清掃性を考慮した口腔内環境を整えることにより、患者自身によるプラークコントロールも行いやすくなり、かつメインテナンスする側も多くの時間を費やさなくてもメインテナンスを行うことも可能となる。

清掃性を高めるうえで歯周病学的配慮は不可欠なものである。そしてそこに矯正治療を用いることにより、より清掃性の高い環境を得ることが可能となり、さらに精度の高い補綴治療を行うことにより、歯周組織を守る人工物の供給が可能となる。

近年、**Interdisciplinary Dentistry** として歯科治療各分野の専門的統合治療の重要性が叫ばれている。歯科治療を行う上で、治療のそれぞれの分野の知識と技術を駆使し、総合的な視点に立つことの重要性は誰しもが認識していることであろうが、今ここで求められるのは、各々の知識、技術の水準の高さは当然のことながら、治療目標の共有化とその明確さではなかろうか。

今回、我々の診療所で行ってきた歯周治療、矯正治療、インプラントおよび補綴治療を含む総合治療に関し、臨床例を通じて、私達の診療スタイルや診療に対するコンセプトをお伝えすることが出来れば幸いである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◎小野 善弘（おの よしひろ）先生
銀座ペリオインプラントセンター　院長
JIADS ペリオ・インプラントコース　講師

◎中村 公雄（なかむら きみお）先生
貴和会歯科診療所　院長
JIADS 補綴コース　講師